



一つのみかん

【広島県】
柚木 未奈 ゆのき みな
19歳

私は小さい時、注射が大嫌いでした。小さいころは必ず打ちに行くインフルエンザの予防接種が一番嫌いで一番怖かったのを覚えています。

一般的に注射が苦手な子は多いと思いますが、大きな声で泣く程度で終わります。しかし、私は注射しようとしている看護師さんをこれ以上ない力で蹴りまくり、その病院の看護師さん全員とお母さんで私の身体を押さえて注射されるくらい、大変な子でした。

注射が終わった時、ある1人の看護師さんが私のもとへきて「すごいパワーだったね。みなちゃんよく頑張ったからこれあげるよ」と言ってみかんを一つくれました。私はそ

の時「ありがとう」と言ったけれど、注射針を刺され、押さえつけてきた看護師さんに対する怒りと悔しさで、こんなみかん一つで誰が喜ぶんだよと、ひねくれたことを心の中で思いました。

そしてまた1年がたち、予防接種の時期がやってきました。くっそ、また注射かよと思いつつも同じ病院に連れていかれました。病院に行く前、お母さんから「今日は絶対に看護師さんのこと蹴ったらダメよ」と言われていたけれど、蹴る気満々でした。

受付を済ませ、待合室のところ、自分の名前がずっと呼ばれるのと願っていましたが「柚木さん、中にお入りください」という恐れてい

た言葉が聞こえました。私は嫌々中に入りました。すると、みかんをくれた看護師さんがいました。その看護師さんは私のところへきて「嫌だと思っけど今日も頑張ろうか! あつ、今日は後じゃなくて、先にこれあげる」と言って去年と同じように一つのみかんをくれました。この人、毎日みかん持つてののかな、まあ頑張るしかないな、怖いな〜と思いつつ、みかんを片手に持ち、じつと堪えました。すると、痛いけどすぐ終わることに気が付き世界一嫌いなものじゃなくなりました。それから予防接種を打ちに行くたびにみかんをもらうのが恒例行事になっています。



「思い」を看ていただいた

【東京都】伏見 浩之 ふしみ ひろゆき 56歳

2歳を迎えたばかりの娘が夜中

に高熱を出した。1年前に肺炎で入院した経過があるので朝を待たず夜間当番医を探した。見付けたのは5年前に父を看取った総合病院だった。父の入院期間は7カ月ほどだったが、当時のことを思い出し少し重い気持ちになった。しかし、真つ赤な顔で苦しうに息をする娘を見ると迷う余地はなく、電話で予約し妻と急いで身支度を整えると病院へと車を走らせた。

夜間通用口から入ると、そこに懐かしい顔が待っていた。父の入院当時に大変お世話になった看護師さんの1人だった。

「受付から名前を聞いて、もしやと思って待っていました。やっぱりあ

の時の息子さんですね」

「はい。あの節は大変お世話になりました。今日は娘が……」

お辞儀をしてあらためて顔をうかがうとその目に涙が浮かんでいたのが驚いた。今は師長をされているその方は、別の看護師さんに妻と娘を診察室に案内するよう指示すると私を廊下に引き留めた。

「お父さんはね、あなたの結婚をずいぶん心配されてたんですよ。娘さんには申し訳ないけれどこうして会えてよかった。お父さんとの約束を果たせたようで安心しました」

そして当時、病室を訪れるたびに父が話していたという心配ごとの数々を話してくれた。まだ現役だった職場のこと、早くに妻が他界し

たため男手で育てた私や姉のこと

など、家族にだからこそうえなかった父の悩みを聞いていたとのことだった。

父が他界し病院を出る時、ほかの看護師さんたちがうつむく中、彼女だけ表情を変えず黙って見送る姿が印象的だったので、まさかそんなやり取りがあったとは思わなかった。父の思いまで看ていただいていたことに5年たつて気付かされた。診察を終え安堵して戻った妻と娘を穏やかな笑顔で迎える姿にあらためて感謝し、この上ない安心感を持って病院を後にした。



柑橘系のアロマ

【千葉県】小口 佳月 おぐち かづき 31歳

妊娠生活というのは、幸せなものだと思っていた。個人差もあるの

だろうか。私にとつての妊娠生活は、決して楽しいものではなかった。つわりがとても重かったのだ。食べては吐きを繰り返し、血も吐いた。水も受けつけず、点滴で水分を補給した。入院は2回した。1度目はつわりの点滴入院。2度目は、情緒不安定による入院――。

妊娠6カ月のときのことだ。つわりは一向に治まらず、私はうつ状態になった。夜もほとんど眠れず、布団の中で泣いていた。そんな私を見て、夫が私の母に電話をした。「もう実家に返しますよ」と。

次の日、私は手首を切った。ナースステーションの前の個室に、

私は入院した。病室の窓は、開かないようにされた。涙が止まらな

かった。毎朝、看護師さんが来て、おなかの赤ちゃんの心音を聞かせてくれる。私の子として生まれて、この子は幸せになれるのだろうか。そう思うと、また涙が出た。

病院食も、あまり食べられなかった。開かない窓から陽が差す中、のろのろと箸を動かし、口に運んだ。膳を下げてもらったあと、吐き気がこみ上げた。トイレは病室の外にある。間に合わず、床に吐いてしまった。ナースコールで看護師さん

を呼び、泣いて謝った。看護師さんはニコリと笑い、「大丈夫。びつくりしちゃったね」

そして、素早く床の物を片付け

てくれた。

床をきれいにすると、看護師さんがアロマの精油を持ってきてくれた。コットンに精油を湿らせ、机の上に置いた。

看護師さんが去ったあと、枕に頭を預け、ぼんやりとその香りを吸った。目尻を伝う涙が次第に乾いていく。その上をまた新しい涙が伝っていくのが、不思議と心地よかった。

あのときの赤ちゃんは、無事生まれた。弱い私から、色んな人がこの子を守ってくれた。私を守ってくれた。あのときはごめんね、と娘の頭をなでた。



看護の心をみんなの心に

**5月12日は
看護の日**

www.nurse.or.jp

【主催】 厚生労働省／日本看護協会

【後援】 文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】 日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会／
日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団／全国訪問看護事業協会／
テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／ナガイレーベン(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)／
パルシステム生活協同組合連合会